

「七、八の段は泣きの段といって、泣かなくては覚えられないのだ。」

と、兄は伊策をはげまします。わきで、針仕事はりごとをしている母が、

「どうせ教えるなら、泣かせないで教えてやれ。」

というのですが、兄の耳にはとどきません。

このやり方は「割り算九九」さえ覚えてしまえば、あとは自然と正しい答がでるようになっていきます。伊策も、泣きながらやっているうちに、だんだんと答があたるようになってきました。答があたるようになると、伊策は、そろばんが好きになっていきました。

明治二十四年（一八九一年）、十六歳になった伊策は、太田先生にかわって夜学がくで勉強を教えてもらっていた川島甚平先生かわしまじんべいのすすめで、母校ほこうの栄富小学校えいとみの先生になりました。先生といっても、その資格がなかったもので、先生の助手じよしゆのような仕事でした。この川島先生は、会津の戦争の前におこった京都の戦いで